

※典拠資料の略称 『定親全』（『定本親鸞聖人全集』）・『真聖全』（『真宗聖教全書』）

註

(1) 読みやすさを考慮して、原文にある漢字の読み仮名は除き、ひらがなをカタカナに変更した。

(本学講師 真宗学)

世界史における東アジアとアフリカ

——いくつかの事例から考える——

古川 哲史

本研究は筆者が現在まで取り組んできた〈日本—アフリカ関係史〉の研究を出発点に、対象地域を東アジアに広げて、近現代（とりわけ19世紀後半から20世紀）における東アジアとアフリカとの関係を、世界的な視点から明らかにすることを目的とする。従来、世界史あるいはアジア史やアフリカ史において、個別に扱われてきた諸相を繋ぐ接続性を見出す作業であり、その関係性について歴史学および歴史哲学的考察を試みる。

今回の発表では、第二次世界大戦期以降の日本、大韓民国（以下、韓国）、中華人民共和国（以下、中国）とエチオピアとの関係の事例を、関連の地図や写真（絵葉書や記念切手なども含む）とともにいくつか示した。そし

〈キーワード〉「賢者の信」と「愚禿が心」、
『選択本願念仏集』、『観経疏』「至誠心積」

て、本研究テーマの学術的意義や教育的・社会的意義などにも言及した。

日本とエチオピアは、一九二〇年代以降に、アジア・アフリカにおける数少ない独立国として外交関係を築き始めた。当時、日本側のエチオピア市場への経済的関心や、エチオピア知識人の近代化モデルとしての日本への注目もあった。一九三一年、エチオピアのハイレ・セラシエ一世皇帝（在位一九三〇年—七四年）は外務大臣ヘルイ・ウォルデ・セラシエ率いる使節団を日本に送っている。この使節団の目的は、両国の関係強化とともに、日本がいかに近代化を到達させたかを実際に各所で視察するというものであった。こうした一九三〇年代半ばまでの関係もあり、第二次イタリヤ・エチオピア戦争（一九三五年—三六年）時には、日本では人種的要因も強調されながら、「アジア主義」団体を中心に日本人によるエチオピア支援運動が盛り上がっている。

第二次世界大戦後の一九五六年—一月には、ハイレ・セラシエ皇帝が初めて来日した。独立を回復した戦後日

本を訪れた最初の国家元首であり、昭和天皇が羽田空港で出迎えている。一九六〇年には日本の皇太子夫妻（現在の天皇・皇后）がエチオピアを訪問している。一九六四年の東京オリンピックでは、マラソン優勝者のアベベ・ビキラが話題となった。おそらく、戦後の日本で最も人口に膾炙したエチオピア人という点では、アベベが一番であろう。一九七〇年の大阪で開催された万国博覧会には、ハイレ・セラシエが再来日した。

近年では、日本政府が主導して一九九三年に東京で開催されたアフリカ開発会議（TICAD: Tokyo International Conference on African Development）に、エチオピアからメレス・ゼナウイ首相が参加している。二〇〇六年四月には当時の小泉純一郎首相がエチオピアを訪れた。日本の首相の初めての同国公式訪問であった。アフリカ開発会議は、その後、第二回（一九九八年）、第三回（二〇〇三年）、第四回（二〇〇八年）、第五回（二〇一三年）と開催されている。この会議は、日本政府がアフリカ大陸での政治的、経済的存在を高めようとするアフリカ政策の重

要なものである。国際連合といった国際舞台でのアフリカ諸国のもつ票数や影響力も、日本政府にとっては無視できない。その一方で、アフリカは「世界で最後に残された新興市場」とマスコミで取り上げられるように、中国の急速なアフリカ市場進出や資源確保政策、韓国のアフリカへの経済関係強化政策など、現在の日本のアフリカへの関わりは東アジア諸国による市場・資源獲得競争に大きく影響されている。日本―アフリカ関係は、こうした東アジアの動向にも注視して考察する必要がある。

第二次世界大戦後の朝鮮半島とエチオピアの関わりでは、朝鮮戦争（一九五〇年―五三年）を挙げる事ができる。当時、親米路線にあったエチオピアは、アメリカ主導の国連軍に加わり、一九五一年より六〇〇人以上の兵士を朝鮮半島に送っている。一九六三年には大韓民国（韓国）とエチオピアは国交を樹立し、一九六八年五月にハイレ・セラシエ皇帝が韓国を訪問した。（韓国ではその来訪を記念した村正熙大統領とハイレ・セラシエの図柄の切手が発行されている。）エチオピア皇帝の韓国滞在中には、

朝鮮戦争の激戦地であった春川^{チンチュオン}でエチオピア軍「参戦記念碑」の除幕式も執り行われた。そうした歴史的経緯ゆえ、現在、春川はアデイス・アベバの友好都市となっている。

一九七四年にエチオピアで軍事革命が起きハイレ・セラシエ政権が倒されると、韓国はそのソビエト連邦寄りの軍事・共産主義政権とは距離を置くことになる。（一方、朝鮮民主主義人民共和国は一九七五年にエチオピアと国交を結び、軍事や技術援助での関係を深めた。）一九九一年、冷戦後のソ連の支援を失った軍事・共産主義政権が崩壊し、メレス・ゼナウイ率いるエチオピアの新政権が誕生した後、韓国とエチオピアは再び接近する。韓国はアフリカ各国との経済関係の構築、市場開発を本格化させ、二〇〇六年には第一回「韓国―アフリカフォーラム」をソウルで開催した。その後、同フォーラムは第二回（二〇〇九年）、第三回（二〇一二年）と開かれている。二〇一一年七月には、李明博^{イ・ミョンボク}大統領が韓国の元首として初めてエチオピアを訪問し、メレス首相と開発政策や

経済協力、韓国型発展モデルなどを議論し、朝鮮戦争に従軍したエチオピア兵とも会っている。

中国とエチオピアの関係については、ハイレ・セラシエ皇帝の帝政末期までは、とりわけ外交面では消極的なものであった。中国では毛沢東マオツォードンなどの指導者が、第二次イタリアリエチオピア戦争でエチオピアがイタリアに敗北した原因を共産主義運動の欠如と論じていたことや、皇帝を頂点とした封建主義体制とはイデオロギー的に相いれないといった要因が指摘されている。したがって、一九四九年に毛沢東が率いる中華人民共和国が誕生したが、冷戦体制の中で「西側」陣営に属するエチオピアとの国交樹立はなかった。中国政府はエチオピアからの独立を目指すエリトリア解放戦線に武器援助やゲリラ戦の訓練の機会を提供していた。後にエチオピアから独立（一九九三年）してエリトリアの初代大統領となるイサイアス・アフェウエルキも、中国で政治思想を学び軍事訓練を受けた一人である。

中国政府とエチオピア政府が国交を結ぶのは一九七〇

年である。前者はエリトリアをエチオピアの領土、後者は台湾を中国の一部と認めるなど、現実主義的な外交や政治政策の結果とも言える。一九七一年一〇月にはハイレ・セラシエが中国を公式訪問し、毛沢東と会っている。中国の国家主席が初めてエチオピアを訪れるのは、ソビエト寄りのエチオピアの軍事政権が倒れた後であった。一九九六年、中国とアフリカの外交や経済関係強化のため、江沢チャンツォーミン民主席がエチオピアを含むアフリカ六か国を訪れた際となった。二〇〇〇年には第一回「中国—アフリカ協力フォーラム」が北京で開催され、二〇〇三年に第二回フォーラムがアディス・アベバで開催されている。二〇〇六年には中国政府はアフリカとの関係を「戦略的パートナーシップ」と位置づけている。その後、現在まで続くアフリカ市場開拓や資源やエネルギー確保を中心とした中国の積極的なアフリカ外交・経済政策は、エチオピアなどアフリカで働く中国人労働者を増加させた。

本発表では、第二次世界大戦後の日本や韓国、中国と

エチオピアとの関わりの事例をいくつか取り上げた。それらの事例だけでも、そうした関係の背後に政治・経済・文化などの分野で学術的かつ学際的に明らかにすべきテーマを見出せるであろう。日本あるいは東アジアに住む多くの人にとっては、物理的にも心理的にも「遠い」と認識されがちなアフリカではあるが、その歴史的關係においては、東アジアの要因、東アジア史や世界史の枠組みをより考慮して明確にすべき点も多いと思われる。その一方で、本研究は実証面での課題（資料・情報収集、口承資料の扱い、他）、理論面での課題（研究対象の時代区分や地域設定、「東アジア」「アフリカ」などの扱い、関係史のテーマでは「陸・海・空から見た歴史」に加えて、現在では「仮想空間における接続性、関係性」の視点も必要か、他）が多々考えられる。

世界はもともと地球規模で、グローバルに繋がってきたと言えるが、二一世紀の現在は世界の諸地域の人や物、資金、情報や思想、技術や社会制度などの接点あるいはネットワークが急速に増加（あるいは消滅）する時

代でもある。現在を生きる私たちにふさわしい歴史認識や世界観が必要とされていよう。それゆえ、本研究は、世界における他者理解や相互理解（ひいては自己理解）に有益となる知識や視座を、学界だけでなく、広く教育現場や社会に還元・提供できる可能性を持つものである。

（本学教授 歴史学、比較文化・社会論）

〈キーワード〉関係史、歴史認識、世界観

〔編集委員会付記〕

この他の発表者及び発表題目は次のとおりである。

片仮名本『因果物語』の姿勢

—— 一向宗関係因果譚を手がかりとして——

本学講師 中川眞二

関連性理論による子どものことば（発言）の分析

本学教授 下道省三

以上の発表内容は次号以降の『大谷学報』に論文として掲載予定である。